

# 突厥・ソグド人の東ローマとの交流と狼伝説

## 内 藤 みどり

### 序

突厥は第三代木杆(ムハン)可汗期(553-572A.D.以下同じ)に大発展期を迎え、東の契丹、北の契骨キルギズを支配下に入れたのに対し、西では嚙嚙すなわちエフタルを破ったとされている。このエフタル討伐実行者が、木杆可汗ではなく、イスラム史家タバリー Tabarī の伝えるシンジブー・ハーカーン Singibū Khakān で、東ローマ史家メナンドロス Menandros が伝えたシルジブロス Sizioulos であること、彼がササン朝ペルシアのホスロー Khosro 一世(531-579)と東西から挟撃して、エフタルを五六三年から五六七年の間に一応討滅したことも知られている。シルジブロスはササン朝ペルシアのホスロー一世に娘を与えるという積極的政策をとった

突厥・ソグド人の東ローマとの交流と狼伝説

て同盟を結び、エフタルを東西から挟撃して滅ぼし、建国後約一〇年余りで、エフタルに代わって中央アジアの支配者になったのである。実際にはエフタルだけではなく、アヴァールやその他多くの遊牧民族討伐の結果であったことはいうまでもない。さらに突厥は、エフタルの消滅により強力なササン朝が新たな敵となったので、その敵であったより西方の大勢力、東ローマに手を延べることになる。それでは、突厥がどのように西方に勢力を伸ばして東ローマと同盟を結びまた交流したかを検証し、それがどのような影響を突厥に与えたか、同盟が崩れたのはなぜかなど、隋朝が東西突厥の分裂を画策する以前の、突厥西方の状況と東ローマとの文化交流について考えてみたい。

### I. 東ローマとササン朝ペルシアをめぐる絹貿易の関係

突厥初期の動靜を伝えた東ローマ史料の中でも、メナンドロスの『歴史』<sup>(1)</sup>は、ユスティノス二世とティベリウス一世時代の突厥や、ペルシア、スラヴ、アヴァールなど諸民族関係の史料が詳細で豊富なことで有名であり、すでに多くの校訂・研究や部分訳・対訳などが行われている<sup>(2)</sup>。かつて筆者も、「東ローマと突厥との交渉に関する史料—Menandri Protectoris Fragmenta 訳注」<sup>(3)</sup>として発表したことがある。これはまず五六八年以前の突厥とササン朝ペルシアの関係を記し、すでにソグディアナがエフタルの支配から突厥の支配下に移った状況のなかで、ソグディアナの首領マニアク Maniakh<sup>(4)</sup>が、突厥の君主シルジブロス Sijibulos [Moravcsik, G. (1958) II, 118, 275] の使節としてササン朝の宮廷に赴き、絹の自由な取り引きの許可をホスロー一世に請願している。これは突厥、ひいてはソグド人のペルシアにおける自由貿易を意味するものであったから、ホスローは許可しなかった。そこでマニアクはへローマ人はどの国の人々より多く絹を使用する〉 [EL. Gent. 7: Blockley 10, 1: FHG. IV, 18, 226: 内藤 377] といつて、東ローマに絹貿易の標的を定めさせた。こうしてユスティノス二世の第四年目の初め (五六八年九月頃)、突厥使節はビザンティンに至ってユスティノス二世と対ササン朝の軍事同盟を締結し、それに伴ってソグド人の経済的目的も達成されたと思われる。

ローマ人が絹を好んで使用したことは古来知られているが、その絹の生産に乗り出したのがユスティニアヌス帝期であったことも名

高い<sup>(5)</sup>。東ローマでは、ペルシアから粗絹を輸入して、染色と絨織を行っていた。プロコピウス Procopius [Uper ton Polem Logos Protos VIII, 17: Dewing, H.B. (1954) 226-231.] が伝える、五五二年、蚕の卵を持ちこんだ Serinda (Khotan?) の二人の僧の話も有名である。孵化した蚕はやがて絹糸をつくるが、量産するにはまだ時間が必要で、ペルシア経由での粗絹の輸入が不可欠であった。ユスティニアヌス帝はササン朝ペルシアが絹貿易を独占していることに苛立っていたが、五四〇年からのペルシア戦争の開始で Berytus と Tyre の個人的絹工業が大打撃をうけた。粗絹が商業庁から渡らず絹値が上がった。帝が絹値を固定すると、これらの個人工業は倒産して国营工業に移ったという [Procopius, *Historia Arcana* 25: Dewing, H.B. (1960) 296-302.]。他方、テオファネス・ビザンティノス Theophanes Byzantinos [FHG. IV, 270-1] は、ユスティニアヌス帝期に、あるペルシア人がビザンティンで Seres から持ちこんだ蚕種を孵化させた話をしている。後に、ユスティノス Justinos<sup>(6)</sup> はそれをトルコ人たちに見せて驚かせたというが、このトルコ人たちはマニアクたち突厥の使節であると思われる。なぜなら、その後ユスティノスがゼマルコスをトルコに派遣したことを述べているからで、マニアクたちは絹を売ろうとしたビザンティンで孵化した蚕を見て驚いたにちがいない。

この頃の突厥人は当然ソグド人と共益的関係にあったが、前述のマニアクがローマ人が最大の絹の消費者であることを熟知していた

ことから、自ら使節となってビザンティンに派遣されることを望んでいることから、ソグド人がこれ以前にペルシアだけではなく、東ローマ世界にもその販路を求めて往來していたことは確実である。すでに Hanestad, K. (1955-57), 430-456 が論じているように、ビザンティンの絹貿易はコウカサス越えて古くから行われていたのであり、かつて五世紀頃におけるビザンティンとペルシアとエフタル、そしてソグド人との関係は、六世紀後半以後におけるビザンティンとペルシアと突厥、そしてソグド人とのそれと同じであったと思われる。さらに、De la Vaissière, E. (2002) 237-244 は、ソグド人の黒海北やクリミア半島における植民活動 (Sugdā, Sogdaia をその植民市とする) をその活躍の一環として論じている。この道については VI で後述するが、東ローマへの道は、すでにソグド人によって使用されており、マニアクは突厥使節として他の突厥人たちの道案内をもはたしたと考えられる。

いづれにせよ、ユスティヌス二世の五六八年からの突厥(ソグド人)による絹の持ち込みは、東ローマの待望していた、ペルシア・ルートによらない、北方ルートによる大量の粗絹の到来であった。ササン朝は当然国益を失い、南海経由の貿易に力を注いだが及ばず、外交関係においても両者と対立することになる。

## II. 突厥・東ローマ軍事同盟の成立

### 突厥・ソグド人の東ローマとの交流と狼伝説

一方、五六八年最初の突厥の遣使で、ササン朝をはさむ突厥と東ローマとの同盟が締結されたことはまちがいない。遣使の際、マニアクはシルジブロス可汗の口頭の挨拶と、多量の絹の贈り物と、一通の手紙を持参していた。この手紙はスキタイ語で書かれており、皇帝は通訳を通じて読んだ。<sup>(7)</sup>そして突厥における政治的地理的な質問をしたが、使節は「四君主領あるが、その全民族に対する最高権力はシルジブロスだけにある」と答え、シルジブロスを最高権力者としていた。<sup>(8)</sup>次いで皇帝と使節の直接話法による形式でエフタルとアヴァールについての問答が記述され、さらに「使節はトルコの支配下のあらゆる民族を数え上げ、皇帝に未来における援助を申し出、いかなる地域であろうとも戦う準備があることをつけ加えた。そしてローマ・トルコ間に攻守同盟が結成された。」[Etl. Gent. 7: Blockley 10.1: FHG. IV. 18, 226: 内藤378] マニアクたちは高く両手を挙げて、この約束が神聖で、破った場合には呪いあれと誓っている。また五六九年、返礼として突厥を訪問した東ローマ使節ゼマルコス<sup>(9)</sup>がシルジブロスに伝えた挨拶にもシルジブロスの返答にも、相互の友好が確かめられているが、ローマ側の具体的な対応は書かれていない。<sup>(10)</sup>

しかし、同盟国としての義務をローマ側も負っていたと思われる。その例として、シルジブロスがローマ使節を伴ってタラスに来た時、ペルシアと使節と会って激論となり、<sup>(11)</sup>シルジブロスはペルシア攻撃の準備を始め、ヘローマ人との友好関係を今一度固めた後、彼らを

帰国させた。〔E.L. Rom. 8: Blockley 10.3: FHG. IV. 20, 228: 内藤 380〕事件がある。実際に、五七〇年頃のゼマルコス使節の帰国に同行した突厥使節タグマ・タルカンが、ビザンティンでユスティノス帝に、ペルシア攻撃を要請したことは、ローマ人とペルシア人との戦争の理由の一つとして、(トルコ人が)メデスを攻めて荒廃させ、使者をユスティノスに送ってペルシア人に対する彼らの戦いに加わるよう迫った。〔E.L. Gent. 16: Blockley 13.5: FHG. IV 32〕とメナンドロスが述べていることから明らかである。これが五七二年、ユスティノス二世がペルシアに対する年金の支払いを停止し、東ローマとペルシアとの講和が破れ、両者が争った事件であることはよく知られている。この頃のローマ・突厥とペルシアの関係についてはすでに多数の研究があるが、その多くは東ローマの史料に拠っている。<sup>(12)</sup>

この頃のペルシア側の状況を述べるものに、“Karnāmag-i Anuširvan”がある。ホスロー一世アーノールシルヴァーン治世第三七年(五六八)に続けて、その翌年(五六九年)の項における彼の語りは、当時の状況をよく示している。ホスローは突厥可汗の彼に対する背信を責め、突厥が東ローマ使節を受け入れたことを非難する心を裏返しにして、次のように述べている。〈大ハーカンは私に手紙を書いて、私への背信の弁解をし、その和解と容赦を頼んだ。…(中略)…ところで、彼は皇帝が使節を彼に(送った)ことを述べていた。そして彼は、彼が使節を歓待することについて許可を求

め、そして使節の受け入において何一つ私の命令を越えていなかったこと、財貨を要求せず、友好においても私の承認以外の何一つもなかったと主張した。〕〔Miskawaih, *Tajārib Al-Umam*, 201: Caetani, L. (1909) 201: Emami, A. (2001) [201] 199: Grinaschi, M. (1966) 24-25.〕

この後、ホスローはハーカンのローマとの友好関係に驚かず、無関心であることを装いながら、〈兵士に準備を命じた〉ことを述べている。この〈大ハーカンはシルジブロスに、〈皇帝〉はユスティノス二世に、〈使節〉は〈ゼマルコス〉に当然比定されよう。この回想的なホスローの叙述には誇張を認めざるを得ないが、その中に、確かに彼が突厥と東ローマとの使節交換と、そこで締結された対ササン朝同盟を知って衝撃を受けていたことが窺い知られる。それはゼマルコスらの帰路、コーカサス地方のあちこちで多くのペルシア兵が待ち伏せしていた事実によって証明されるのである。

### Ⅲ. 突厥・東ローマ同盟期間中の使節の交換

ティベリウス帝第二年(五七六)に、ローマ使節ウァレンティノスが突厥の君主トゥルクサントスのもとに到達した。彼はティベリウス帝の登位を告げ、ユスティノスとシルジブロス間で締結された条約を再確認して、当時行われていた対ペルシア戦への参加を求めたのに対し、トゥルクサントスは突厥からローマ領へ逃走したアヴァー

ル人の受け入れとローマとの同盟を責めた。そして後述するように、この後達頭可汗のもとで東ローマ・突厥同盟は完全に破棄された。

この同盟は五六八年から五七六年まで続いたが、その間、両国の多くの使節が往復している。メナンドロスによると、ヘティベリウス帝治世の第二年目ホスローとの交渉の行われる少し前〔ELRom. 14: Blockley, 19, 1: FHG. IV. 43, 244: 内藤382〕、すなわち五七六年の春にティベリウス帝とホスロー一世との交渉が始まっているので、その年の初め頃に、ウァレンティノス Valentinus 使節は第二回目の突厥行使に出発したことになる。その時、ビザンティンに逗留していた全トルコ人一〇六人がともに帰国した。ヘビザンティオンにトルコ人が滞在するようになってからすでに久しく、その間時々トルコから派遣されてくるものがあった。アナンカステスはビザンティオンに使節として赴く際に若干の者を部下として連れてきた。：(中略)：また他の者は以前にウァレンティノスと共に来ていて、ビザンティオン付近に留まり日を送っていた。〔EL. Rom. 14: Blockley, 19, 1: FHG. IV. 43: 内藤382-83〕とメナンドロスは述べ、この時までの使節名をあげているが、突厥使節のアナンカステス Anankhastes<sup>(15)</sup>、東ローマ使節のエウティキウス Eutychnus、第一回目的のウァレンティノス、ヘロディアス Herodias、キリキアのパウロス Paulos の五名で、使節として突厥とビザンティンを往復するに際し両国人が同行した。使節は、帰国時に相手国の返礼使節を伴うのが通例であったからである。突厥使節マニアクの帰国時には

突厥・ソグド人の東ローマとの交流と狼伝説

ゼマルコスが同行し、ゼマルコス使節帰国時、タグマ・タルカンが突厥使節として派遣され、故マニアクの息子を含む使節団、それにシルジブロスに許された二部族の各数名が同行している〔EL. Gent. 8: Blockley 10, 3: FHG. IV. 21, 229: 内藤381〕。このように、毎回両国の使節と使節団が同行し、それに同伴したソグドの商人たちがいたにちがいないから、ローマ人や突厥人そしてソグド人がその間を往復し、また両国に滞在していたのである。彼らはそれまでトルコ人(ソグド人を含む)居留地をビザンティンの一角に設置していたと思われる。結局、最初の突厥使節マニアク・東ローマ使節ゼマルコスと、最後に二回目のウァレンティノスの行使をこれらに加えて、九年間に多分六回の使節交換が行われたと思われる。しかし、これらの使節交換の中で部分的にはあるが詳細な記録が残されていないのは、その最初と最後だけである。

最初のゼマルコス使節の帰路は、天山中のユルドウズの牙庭を出て天山北路を西行し、アラル・カスピ海の北の道を通り、ペルシア軍の待ち伏せを恐れながらコウカサスの北のアラン人を訪ねた。さらにペルシア軍の待ち伏せを避けて、ダレイネ街道(コウカサス越え)から黒海に出、小船でファジスへ、そこから大船に乗ってトラペズスへ、そこからローマの公道でビザンティオンに達している。これはコーカサス越えではあるが、ペルシア人の脅威のためにメイソルトをはずれた可能性もある。他方、ウァレンティノス使節らはシノプから快速商船に乗り、ケルソンにいたり東行したことは前

述したが、これが当時の主道であったことは確かである。しかし、トゥルクサントスがへなせ君たちは私の使節達をコウカサスをへて、ビザンティオンに行かせ、そして彼らが旅行できる道は他にない、と私にいったのか。〔EL. Rom. 14: Blockley 19, 1: FHG. IV. 42, 245: 内藤384〕といって黒海北道について述べているから、当然黒海北の道も使用されていたことが理解されよう。

彼らの行動の期間を追ってみると、突厥の使節マニアクがビザンティオンに到着したのはヘュステイノス治世第四年目の初め、五六八年九月頃で、東ローマ使節ゼマルコスがマニアクとその同伴者とともにビザンティオンを出発したのはヘュステイノスの治世第四年目の終わり近く、一五年周期の第二年、ラテン人が八月と呼ぶ月の初め頃、すなわち五六九年八月初めであった〔Dojger, F. (1949) 1, 67〕から、その間約一年近く、突厥使節はビザンティオンに滞在していたことになる。

一方、ゼマルコスは五六九年の冬頃には天山中のシルジブロスの牙庭に到着したと思われる。その後、シルジブロスに同伴してペルシア戦争に出発したが、タラスでペルシア使節と接触した後帰国した。突厥使節タグマ・タルカンを伴ったゼマルコスたちの出発は、五七〇年も前半とは考えられず、彼らの逗留を二年とする John of Ephesus<sup>(16)</sup>によって、五七一年とする意見もある〔Rissu, I. I. (1970) 416〕。そこで五七一年から五七六年までの六年間に五回の使節交換が行われたとすると、ほとんど間断なく両国の使節が両国を訪問し

ていたと考える間違いない。そして、往復に費やす期間を差し引いたとしても、両国使節と使節団、突厥人やソグド人を含むその従属集団は、互いの国にある期間、具体的には約一年から半年ほど滞在し、あるいは使節団に同伴してやって来て帰国せずに長期滞在していた人々も確かにいたのである。彼らが表敬訪問と宴会の後、どこで何をしていたのか詮索したいところであるが、詳しいメナンドロスの記録も、これ以上は語らない。

#### IV. ウストウルシャナの牝狼の壁画とローマの建国伝説

##### 一、ウストウルシャナの牝狼の壁画とローマの建国伝説

さて、タジク共和国カライ・カフカハ Kalai Kakhkaha (カフカハ城) 遺跡の宮殿址から、狼伝説を描いた壁画が出土している。この遺跡は現在のシャフリスタン村の西北約半キロにあり、一九五〇—六〇年代にネグマトフ Hermarov, H. H. によって本格的な発掘が行われた。これは古代ソグディアナ北部にあたるウストウルシャナ王宮の宮殿 (I) とその要塞 (II) で、狼の壁画は宮殿 (I) の儀礼用中央通路の西壁に描かれたものであった。この宮殿建築自身の年代は、出土品や考古学的・建築的な見地から、始まりは七世紀より遅くなく一一世紀の終わりまで存在したが、八九三年にサーマン朝のイスマイル・サーマーニーによって侵掠され、ウストウルシャナの領主は根絶したとされている〔Hermarov, H. H. (1973a) 185〕。

スミルノヴァ [Смирнова, О. И. (1971) 59-64] は、この遺跡から出土した貨幣について、その形態とソグド銘の研究からウストゥルシャナ領主の名をあげ、彼らが八〜十一世紀の史料に現れる王に一致しないため、六〜七世紀かそれ以前の、当地の不明の支配者と考えている<sup>(17)</sup>。この遺跡は、香山陽坪（一九七六）253-263. によっても、発見壁画の数枚の写真やネグマトフの素描画（狼伝説の壁画を含む）、簡単な遺跡平面図などとともに紹介されている。

ネグマトフ [Нематов, Н. Н. (1973a), 201; Нематов, Н. Н. (1973b), 3-4.] によると、その牝狼の壁画は、カライ・カフカハの中央通路の西側の壁に描かれていたが、大きさは約一五〇センチ×八五センチで、焼けているため残存状況は悪く、全体的に暗いオレンジ系のトーンで描かれている<sup>(18)</sup>。西壁にはこれを含めて九枚のパネルを繋いだ形の壁画 A が、腰板部の壁画の最上部にある連珠紋の帯上に描かれていた。その中で 8 は、右向きに立ってふりかえる牝狼と二人の後ろ向きの幼児が狼の乳を吸っている図である。これがローマ建国伝説中のロムルスとレムスに乳を与えて養った牝狼の図である可能性は、すでにネグマトフによって論じられている<sup>(19)</sup>。

アザルパイ [Azarpay, G. (1981) 142.] は、ネグマトフ (1973a) による 1〜9 のパネルの壁画描きおこし (図 A) を掲載して、ロムルスとレムス伝説のソグド・ヴァージョンとし、なぜかルーム 1 の壁画としている<sup>(20)</sup>。そして〈この図像の第二の神格〉(パネル 4) が想起させるといふ、ビヤナイマンのオッサリに見える最右の大き

突厥・ソグド人の東ローマとの交流と狼伝説

な鍵を持った神像にローマのミトラ美術の影響を見、ローマ美術のかすかなソグド美術への反映が、五五七年に行われたササン朝と突厥の挾撃によるエフタルの滅亡直前期の特徴であるかもしれないと述べ、七世紀と八世紀の初めには土着ソグド人の美術様式が具現化するとし、八世紀の装飾的な壁画の例をあげている。[Azarpay, G. (1981) 142-43]。他方、Museum Rietberg Zürich (1989) 144-45, 図 91 (ロムルス・レムス、八〜九世紀、高さ七八センチ、幅一一四センチ、ブンジカト、カライ・カフカハの要塞 II の王宮、入り口向いの南回廊の西壁の壁画) は、図 8 と同じ狼壁画の写真で、ブンジカト (実はウストゥルシャナ) の支配者が狼の系統であることを表現したものと推定している。さらにマルシヤク [Marshak, B. (2002) 145] は、Fig. 96 (ロムルス・レムス伝説群、カライ・カフカハ、ルーム II) としてネグマトフ [Нематов, Н. Н. (1973b)] から同じ壁画パネル群を転載し、七〜八世紀に画家が非ソグド起源の外国世界を描いたものと見、ペンジケント Room 1/22 のイソップの〈金の卵を産む鳥〉の壁画同様、それらが西方伝来の書写資料によって描かれた可能性を述べている [同前 142, 144-15]。いずれもロムルス・レムス伝説に言及しながら、意見は分かれている。そこで、この壁画 (図 A) 自身を見てゆくことにしよう。

さて、ウストゥルシャナの壁画の中でも、狼部のパネル 8 が非常にリアリステックで自然な表現であることは、その原画の写真 [Pugachenkova, G., Khakimov, A. (1988) 78] を見れば一目瞭然で

ある。まず輪郭線が柔らかい。狼は耳をたて目を見開き、大きくあける口には歯や牙が見え、腹部は白い。また子供が手を添えて乳房を口に入れていた姿や、脚のふくらはぎの形まで見える。<sup>(21)</sup>狼のパネル8以外のパネルは原画の写真を見られないが、4・9などの正面性、翻るマントなどは、有名なビヤナイマンや特にイシュティカンのオッサリに見える神格の像に似ているように思われる。<sup>(22)</sup>また、パネル1の椅子上の坐像の脚の開き方は、ピヤンジケントの壁画の中でも特に神坐像に多く見られ〔一例：Azarpay, G. (1981) 24, Fig. 3.〕また六世紀とされる同じ開脚形の神像もある〔Azarpay, G. (1981) 43, Figure 13.〕。パネル6は、4・9同様マントを翻して豪華な衣装を身につけているが、向かって左へ歩くか立つかしているのが、王像かと推察される。他方、パネル7の左の人物のだけが、下部しか見えないが、ソグド美術の人物像に見かけないような特異な鋸歯模様の衣装をつけ、パネル6の王の後を、右の従者とともに歩いているように見える。これは訪問者を表したものであろうか。

これら一連の絵を全体として詳細に論議したものはないが、パネル8がロムルスとレムスと牝狼のローマ建国伝説をあらわしているとするれば、これが何故にウストウルシャナの宮殿に描かれたのかが問題であろう。そこで、ネグマトフを始めとして、この図をみると誰もが想起する有名なカピトリノの牝狼の像と比べてみたい。

この壁画の牝狼は向かって右を頭にし、二人の子供の方に首を廻す形で後方を向いている。ところが、カピトリノの牝狼の青銅像

(高さ七五センチ、幅一四二センチ)は、向かって左を頭にし、口を半開きにして首を自分の左側に九〇度ほど曲げ、その前方をはつきりと見ている。これは紀元前五世紀頃のエトルリア文明の傑作として有名であるが、その下の子供たちは、一五世紀にローマ伝説にちなんでアントニオ・デル・ポッライウオーロが作り足したものである。すなわち、カピトリノの狼は、一五世紀に子供たちの像が付け足されるまで、単独像であった。しかし、ローマ伝説がこの狼と付会されていたことは、やはりロムルス・レムス伝説がローマ世界とその後継者たちの間に長く生きていたことを証明するであろう。とはいえ、カピトリノの牝狼の単独像とカライ・カフカハの壁画の牝狼像が、形態的に全く異なっていることはまちがいない。

ところが、ハンガリーのショプロンに、ロムルス・レムス伝説をあらわした浮き彫りがある<sup>(23)</sup>〔ルネ・マルタン監修 (1992) 217〕。その図像を見ると(描ききおこし図Bを参照されたい)、牝狼が向かって右向きに立ち、左向きに頭を後に廻しており、その下に二人の子供がいて狼の乳を吸っている。左側の子供は右向きに坐って乳房に両手を伸ばし、右側の子も足を投げ出して坐り左手を乳房に伸ばし、狼の両側にある木には葉や茎が交差して蕾もつけている。この牝狼と二人の子供たちの像を一つの墓石に刻んだ浮き彫りがローマ建国伝説を表したものであることは疑いがないであろう。

このショプロンの浮き彫り図Bを、タジキスタンのウストウルシャナ(カライ・カフカハI)出土の牝狼と二人の子供の壁画Aのパネ



ル8と比較すると、その構図のあまりの相似に驚かされる。右向きに立つ牝狼、子供たちを見るように後を振り返っている首の回し方、前足二本が前向きに並んで表されており、腹の下で乳を飲む二人の子供の存在など。違いは、ショプロンの狼は影のせいもあってか右後ろ足一本しか見えないが、ウストウルシャナの狼は右後足の他に後に引いた左後ろ足とその間に太い尾が見える。またショプロンの子供たちは向き合って坐って乳を飲んでるが、ウストウルシャナの左の子供は立って乳に吸いつき、右の子は坐っているか、足を持ち上げているように見える。ただし、このような小さな違いを取りあげるとは無駄であろう。両者に直接的関係はないと思われるからである。それでは、なぜ両者はこのように似ているのであろうか。<sup>(24)</sup>

さて、ウストウルシャナの宮殿の建立は七世紀をくだらないというウネグマトフ説、その貨幣から六・七世紀あるいはそれ以前というスミルノヴァ説、狼の壁画をその形式からエフタル滅亡(A.D.557)直前とするアザルパイ説を合わせると、この壁画の年代はほぼ六・七世紀あたりが、考古学的・貨幣学的・美術学的な結論であろう。そこで、いささかの歴史的・地理的考察を付け加えてみたい。

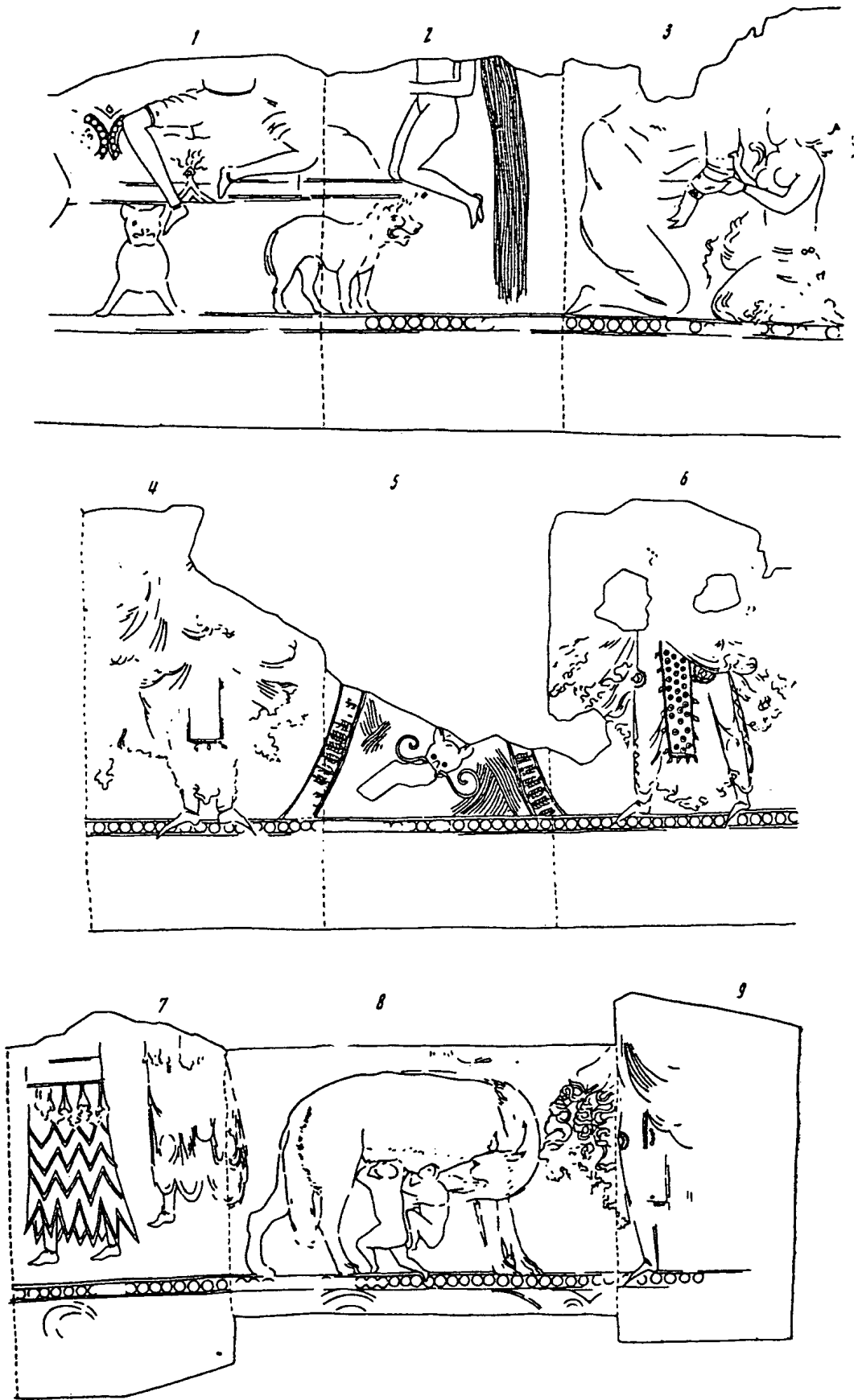
## 二、ウストウルシャナの歴史地理的位置

ウストウルシャナ地方はシル川の左岸、ザラフシャン川の右岸、パミールの西でサマルカンドの東方に位置している。イスラム史料には Ustrushanah, Surushanah, Sutrushah など見えるが、すでに

突厥・ソグド人の東ローマとの交流と狼伝説

リフシツ [Liphits, B. A. (1962) 79, 87, 95, 102.] が指摘したようにソグド語ムグ山文書 (A-9, A-14) に Ustrushana として記されているので、名称は確定されている。ムグ山文書 A-14, 16-17 では、七二二年、Ustrushana がアラブ軍に完全に引き渡されたという情報を、ヘソグドの王、サマルカンドの領主を称していたデーワーシティーチにその使者が送っているが、これはタバリー [Tabari, 2/1442, が述べている、七二二年のアル・ハラシー Al-Harasi 率いるイスラム軍がフェルガナに逃亡したサマルカンド人を討伐した事件に関連しており、フェルガナへの道筋にあたっていた Ustrushanah が僅かの金を払ってイスラム軍と講和したというのは、先の引き渡しに先行する事件であろう。<sup>(25)</sup>

他方、ウストウルシャナは中国史料でも知られている。『隋書』裴矩伝はその中道（いわゆる西域北道）を記述しているが、葱嶺（パミール）・罽汗（フェルガナ）の後、康國（サマルカンド）の前に「蘇對沙那（「ウ」ストウルシャナ）」を記している。煬帝が即位してまもなく、裴矩は張掖に派遣されて西域事情を収集し『西域圖記』三巻を献呈したが、その序だけが彼の伝に残っているので、その時期は七世紀のごく初期かそれ以前にあたる。『隋書』西域伝には、蘇對沙那の項目は立っていないが、罽汗（フェルガナ）と米国（ピャンジケント）項に「蘇對沙那國五百里。」（米國）東去蘇對沙那國五百里。」とその名を残している。他方、『新唐書』西域伝は東曹國伝に「率都沙那、蘇對沙那、劫布单那、蘇都識匿」

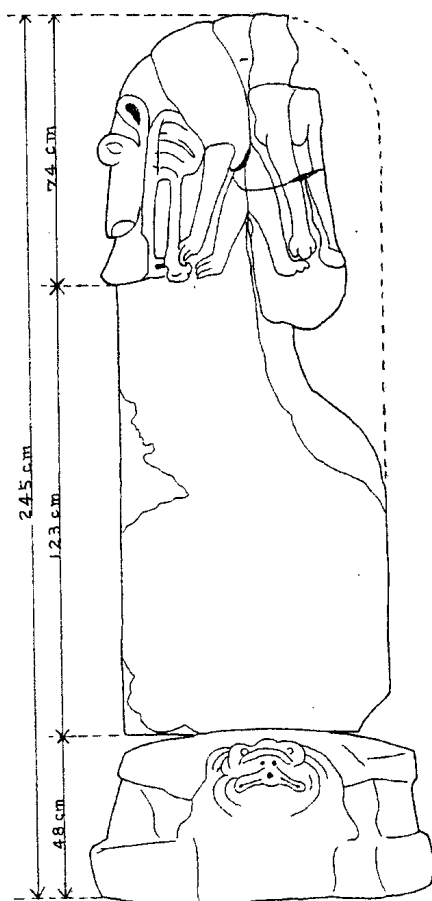


図A：ウストルシャナ宮殿中央廊下西壁の壁画（タジク共和国カライ・カフカハ遺跡I）  
ネグマトフ Негматов, Н. Н. (1973a) より転載。

と名をあげ、〈東北は俱戰提（ホージエンド）まで二百里、北は石（チャチ）、西は康（サマルカンド）、東北は寧遠（フェルガナ）ま  
 でみな四百里〉と記し、唐の武徳中（618-626）に<sup>サマルカンド</sup>康と同道して  
 遣使入朝したことを、〈武徳中、與康同道使入朝。其使曰、本國以  
 臣為健兒。聞秦王神武、欲隸麾下。高祖大悦。〉と述べている。唐  
 へ行ったウストウルシヤナの使節は高祖の麾下に入りたいと願って、  
 高祖を喜ばせたらしい。その年については、『舊唐書』康國伝に〈武  
 徳十年、屈朮支遣使獻名馬〉とあるものが、武徳中の唯一の康國の  
 遣使記録であるので、ウストウルシヤナの遣使もこの時に行われた  
 と考えられる。ただし、武徳は九年で終わるので、『宋本冊府元龜』  
 卷九七〇外臣部朝貢三が〈武徳九年十二月）唐國王屈木支遣使獻  
 名馬〉と記すように、武徳九年（628）のサマルカンド遣使とも  
 に、ウストウルシヤナの唐への遣使が行われたのであった。さらに、  
 『大唐西域記』卷一は、肺捍（フェルガナ）の西千里に〈率堵利瑟  
 那國〉を記し、〈有自王、附突厥。〉と、六三〇年頃、明確にウストウ  
 ルシヤナの突厥への従属関係を述べているのが注目される。

要するに、地理的には、フェルガナのシル川流域からサマルカン  
 ドのあるザラフシャン川流域に移る地域がウストウルシヤナ地方で、  
 ウストウルシヤナ城（カライ・カフカハ遺跡）は北からシャフリス  
 タン峠を越えるとザラフシャン川流域に出る道にあたっていた。歴  
 史的には、シルジブロス可汗時代からソグドの支配権を握っていた  
 突厥は当然チャチ・フェルガナやウストウルシヤナを含む一帯を支

突厥・ソグド人の東ローマとの交流と狼伝説



- ▲図B：ローマ時代の墓の浮き彫り（ハンガリーのショブロンにある）ルネ・マルタン/松村一夫(1992)246の写真よりの書きおこし。
- ◀図C：ブغت碑文正面図（モンゴル国アルハンガイ県ブغت遺跡出土。ツェツェルレク市のアルハンガイ博物館中庭にある）森安/オチル(1999)Plate 1eのバヤル氏の原図に推定原型点線と寸法を書き入れたもの。

配下においていたし、サマルカンド康国王にその娘を嫁がせていたタルドゥ達頭可汗も同様であったことはいうまでもない。その後六二六年、ウストウルシヤナはサマルカンドとともに唐朝に遣使し、喜んだ高祖から多くの絹を得て帰国したことはまちがいあるまい。さらに六三〇年、玄奘はインドへの行程の保護を求めて、中央アジアとカピシに到るまでの覇権を握っていた西突厥の統葉護可汗（やはりサマルカンド王に娘を嫁がせていた）を天山北のスイアブ地方に訪ね、その保護下に、チャチ、フェルガナーウストウルシヤナーサマルカンドへと西突厥支配下のルートをとリ、やがてアム川を越えて、活国クンドゥズにいる統葉護可汗の長男咄度設を訪問する。

ところで玄奘は、天山北の素葉城（現アク・ベシム遺跡）から羯霜那（ケツシ、現シャフリ・サブズ）までを宰利（ソグド）と呼び、素葉城以西の都市がみな独立的な君主を擁し（『大唐西域記』卷一）と、素葉城以西の都市がみな独立的な君主を擁しながら、突厥に属していると述べている。宗主的突厥の支配下で、天山北路のソグド人植民市やサマルカンド・ウストウルシヤナを含むソグディアナの諸都市が独立的であった様相が窺える。しかし七二二年には、ムグ山文書中のフンすなわちトゥルギシュ突騎施（西突厥の後継者）の助けの及ばない状況の中で、多くのソグド都市同様、ウストウルシヤナもアラブの勢力下に入ったのであった。

そこで、ウストウルシヤナ城にローマの始祖伝説が描かれた理由を考えてみたい。ウストウルシヤナ城に絵を描いたのは、ウストウ

ルシヤナ人（あるいは彼らに依頼された人物）と考えられると、そこには明らかにウストウルシヤナと東ローマとの関係が見られる。彼らが東ローマと最も関係の深かった時期は、彼らの支配者であった突厥が東ローマと同盟を結び、継続的に使節を交換していた五六八年から五七六年の間であった。チャチあるいはフェルガナとサマルカンドを結ぶ交通路に位置したウストウルシヤナ人は、やはり中継貿易に関わる商人で、突厥使節と同行してビザンティンに行った多くのソグド人の一部であったと推察される。彼らが狼伝説に興味を持っていたのは偶然ではなく、東ローマと突厥の使節たちが常に往復滞在していた当時、狼伝説が流布していたためと思われる。同盟を維持し国交を深めるために相互に訪問していた東ローマと突厥両国の人々が、人種も言葉も生活も信仰も、全ての点で異なる異国の地で、共通の話題を見いだしたとすれば、これほど彼らの親交のために嬉しいことはなかったであろう。その共通の話題こそが両国共通の始祖狼伝説であったと考えられる。そして、流布していた狼伝説に興味をもっていった人々が東ローマへ行った時に、シヨプロンにだけではなくあちこちにあるローマの狼伝説の浮き彫りや像や壁画を見た可能性も高い。また突厥に来ていたビザンティン人がソグディアナを訪問した可能性も十分ありえよう。そこで、ウストウルシヤナに狼伝説を描いたのはやはり彼ら自身（あるいは彼らの依頼者）であったと推測しておきたい。もちろん証明はできないが、これが同じテーマで同じ構図の壁画とレリーフが全く異なった場所で出土したこと

の唯一の帰結であると思われる。

## V. ブグト碑文の頭部浮き彫り

ところで、モンゴリアのアルハンガイ県ツェレルク市のアルハンガイ博物館の庭に、ブグト碑が立っている。これは、突厥第一可汗国第四代可汗マガ・タトパル（佗鉢五七一―五八一）のために、その子マガ・ウムナ可汗（菴羅）が建てたといわれており、ブグト市郊外にあるブグト遺跡から移されたものである。この碑の四面中三面がソグド語ソグド文字碑文で、一面はサンスクリット経文と推定されており、これについての詳細な報告と吉田豊氏による新しい読解が行われ「森安孝夫・オチル責任編集（1999）121-125」、その碑全体の見取り図が、片山・吉田・バヤル氏らによってPlate 1a（*ア*）として提供されている。ここで問題にしたいのはその碑頭部の浮き彫りであるが、これまで発表されてきた写真[Клишторный С. Г. и Лившиц, В. А. (1971) 121-146, Klyashtornyi, S. G. and Livšic, V. A. (1972) 69-102. 96, Fig.3.]にはない小さな二断片<sup>(28)</sup>が発見され、接合したその正面図がバヤル氏によってPlate 1eとして発表され（これをもとに図Cを作製した）、最近TIKAによってブグト碑文と二断片のカラー写真も発表された[TIKA (2001) 153-164]。しかし、碑は二断片を接合しても、正面に向かって右側がまだ大きく欠損しているので、これで全てが復原されるわけではない（図C）。

### 突厥・ソグド人の東ローマとの交流と狼伝説

そして断片が接合することに気づかなかった上掲の論文で、クリヤシトルヌイとリフシツ氏はすでに突厥の始祖伝説である狼伝説をあらわしたと考えたが[Klyashtornyi, S. G. and Livšic, V. A. (1972) 71.]前掲報告書「森安孝夫・オチル責任編集（1999）122」も同意見で、「牝狼が、自分の生んだ人間の赤子に授乳している場面が描かれていたのである」としている。この頭部の浮き彫りは、第二可汗国の碑文にみえる山羊型の線書きタムガヤホシヨ・ツアイダム碑文I・IIの頭部にみえる龍などとは異なった、具体的な狼の造形である点で非常にユニークである<sup>(30)</sup>。狼頭は向かって左に向き、立った耳、突き出た目、その下の鼻と口、その下と横は不明であるが、胴に続いて彫り出された前足と三つに分かれたその足先と、その右に人間の片足らしいものがみえ、断片中にも足先の分かれた後足と人間の足らしいものが見える。

このブグト碑文の建立年代をタトパル他鉢可汗の亡くなった五八一年とすると、それはタルドゥ達頭可汗が五七六年に東ローマとの同盟を破棄してより約五年後に当たる。一方、開皇元年（五八一）年のこととして、北周末から突厥問題を担当していた長孫晟が、当時の突厥情勢分析の中で計画した突厥東西分離策を記している『隋書』長孫晟伝。他鉢可汗の亡き後、四面に分居していたのは、撰図（沙鉢略可汗）・玷厥（達頭可汗）・阿波（木汗可汗の子大邏使）・突利（撰図の弟處羅侯）であり、晟は「玷厥之於攝圖、兵強而位下、外名相屬内隙已章、鼓動其情、必將自戰。」とも述べているから、

沙鉢略は大可汗であったが、最強の兵力すなわち実力を持っていたのは西面可汗達頭であった。シルジブロス可汗より受け継いだタルドゥ達頭可汗の強大な勢力は五七六年より五八一年頃までは衰えていなかったのである。実際、タトパル他鉢可汗が亡くなった後、撰図（乙息記可汗の子・他鉢可汗の東面可汗）が大可汗位に即くためには、このように強力なタルドゥ達頭可汗をはじめ、第三代ムハン木杆可汗の子大邏便（阿波）、人氣のあった處羅侯突利らの中で、他鉢可汗の子菴羅をまず可汗に擁立し、菴羅の短期可汗在位後、第六代沙鉢略可汗となり、菴羅を〈第二可汗〉『隋書』突厥傳』として共同統治体制をとらなければならなかったと考えられる。ブグト碑文の B-2: 18-19 に〈二人の可汗〉〔吉田 (1999) 124. 以下同じ〕と見えるのが菴羅と撰図で、ブグト碑文の文頭 B-1: 1-3 は、〈この「法の石」を突厥のアシナス族の王たちが建てた〉と記すから、タトパル可汗の死後約半年後に第二の葬式を行い、「法の石」と呼ばれるこの碑文を立てたのも彼らであったと思われる。ただし B-2: 7-9 には、〈マガウムナ可汗（菴羅）を王位に就けた〉とあり、撰図は B-1: 1-3 の〈ニワル（爾伏）可汗〉<sup>30</sup>として現れているので、菴羅の可汗在位期も撰図との共同統治体制がとられていた可能性が高い。つまり、多くの強力な実力者たちの中で、特に突厥繁栄の基礎をつくったムハン可汗の子大邏便（阿波）に対抗して、撰図が血統的に正統性のある前可汗の子菴羅を擁立し、共同統治体制をとっていた時期に建て、自らの正統性をも主張したのがこの碑であったと

思われる。<sup>31</sup>とすれば、その〈アシナス（阿史那）〉であることの正統性を主張する碑文を飾る碑頭のテーマが突厥伝説であったことは、誰しも理解できよう。問題は、なぜこの中国的廟に立てられたブグト碑頭の浮き彫りが、他の碑頭に比べて明らかにリアルに表現された牝狼と乳を飲む子供（阿史那氏の祖先）の図であったか、である。さて、ブグト碑文の三面のソグド語文を実際に書いたのが、他鉢や菴羅・撰図の参謀や取り巻きであったソグド人たちであったことはいうまでもない。しかも彼らは突厥の始祖伝説について熟知しており、またローマの牝狼の始祖伝説を知っていた可能性は高い。彼ら自身が商人で情報の収集能力が高く、目的にそって自由に動き、ソグド本国とも西面可汗国とも、間接的には東ローマとも連絡網をもっていたに違いないからである。しかも他鉢可汗時代前期には、東ローマ使節たちがシルジブロス可汗のもとに絶えず来ていて、その情報は広く流布していたと考えられる。多くの可能性が考えられるが、要するに、ローマ始祖伝説の具体的な表現を知っているソグド人がいて始めて突厥の始祖伝説の立体的な浮き彫りができたと考えたい。

## VI. 突厥・東ローマ同盟の破棄と新情勢

ところで、何故突厥と東ローマの同盟は五七六年に破棄されたのであろうか。その重要な理由の一つは、シルジブロスの死である。

ウァレンティノスが突厥に到着した時、その西部、スイアブ地方にいたと思われる君主トゥルクサントス〔内藤(1962)30-40、(1988)396-405〕はシルジブロスの葬式を行っていた。ヘトゥルクサントスは(ウァレンティノスに)いった。君たちローマ人がここに到着した時、私は深い悲しみに遭遇していた。(なぜなら、わが父シルジブロスがまさに亡くなったところであったからである。)君たちが我々のもとで、法により故人のために剣で顔を傷つけられるのは当然である。"たちまちウァレンティノスと彼の従者たちみなは顔を剣で引き裂かれた。"〔EL. Rom. 14: Blockley, 19, 1: FHG. IV. 43, 247: 内藤385.〕

このトゥルクサントスには、その父シルジブロスとの明らかな世交代と、外交方針の違いが認められる。たとえば、ウァレンティノスがティベリウス帝の即位を告げ、東ローマの対ペルシア戦争に参戦するよう要請したのに対し、トゥルクサントスはアヴァールと同盟したローマを激しく責めた。ウァレンティノスは「あなたの父君シルジブロスが我々の国に友情を乞うた時、彼はペルシア人よりもローマ人の友人でありたいと望んだのだ。そこで我々の関係は破れず存続した」〔EL. Rom. 14: Blockley, 19, 1: FHG. IV. 43, 247: 内藤384.〕といい、友好関係の存続を迫ったが、彼は受け入れず、次いでウァレンティノスを彼の兄タルドゥ〔Tardu〕に送った。彼が訪問したエクテル(金の)山、すなわちユルドゥズ溪谷〔松田壽男(1929)Ⅰ、53-74, 同(1956, 1970)260-274.〕にいた彼の兄タルドゥ

突厥・ソグド人の東ローマとの交流と狼伝説

〔Tardu〕達頭可汗との会話は記録されていないが、彼がシルジブロス可汗の後継者であり、東ローマとの同盟破棄を宣言したことはまちがいない。彼はその直後にボスポロス(黒海のケルチ)攻撃のため、大軍隊を派遣したからである。この時(すでにアナガイオスが他のトルコ人とともにその地域に陣を張っていた)〔EL. Rom. 14: Blockley, 19, 1: FHG. IV. 43, 247: 内藤385.〕。アナガイオスは後述のウァレンティノスの往路にみえるウティゲール族の首長で、彼をリーダーとするトルコ連合隊が黒海東岸近くに到達していたのである。さらに、「ボスポロス市が奪取された時、ローマ使節たちはトルコ人のそばにいた。このように、トルコ人がローマ人と戦いを引き起こそうとしていたことは明かであった。そこで派遣された者たちにたいし、その中にウァレンティノスが含まれていたのだが、トルクサントスは侮辱し、あざけるばかりかさらに悪し様に扱って、そして送り出した。」〔EL. Rom. 14: Blockley, 19, 2: FHG. IV. 45, 247-48.〕と記されているように、ウァレンティノスはかつて友好的であったシルジブロス時代とはまったく反対の対決姿勢を見せつけられ、追い返された。アヴァール使節がティベリウス帝に、シルミウム攻撃のためにダニューブを渡る船を要求してきた際(シルミウム攻撃第一回は五七六〇七七年に行われたので、その直前と思われる)、ティベリウス帝は、トルコ人がケルソンにいて直ぐその情報を知るのであろうといって、攻撃の延期を助言したが、アヴァール使節はそれがトルコ人への恐怖を利用した作り話であることを察しながら、

多くの贈り物を得て帰国したという [E.L. Gent. 31: Blockley, 25, 2] 要するに、この時ボスポロス市は突厥の支配下に置かれ、ケルソンを狙う状況であつたらしい。ケルソンは、ウァレンティノスの往路にみえるが、東ローマ下の自治都市で、首都から出発した彼らが〈商船に乗ってシノベとケルソンをへて、アパトゥーラをすぎ、さらにも多くの部族の中を通過していった〉 [E.L. Rom. 14: Blockley, 19, 1: FHG.IV. 43, 245: 内藤383] と述べられているから、黒海を越えるメインルートの中で、帰路にも当たっていたと思われる。いづれにせよ、突厥の西方への進出はめざましく、この時始めて黒海付近で東ローマとの直接的な軋轢が生じたのであつた。

一方、ローマとササン朝ペルシアとの関係も悪化しつつあつた。五七五年のローマ・ペルシア講和条約に含まれなかつた、アルメニアへのペルシアの侵入が五七六年に行われ、これは失敗に終わったが、ローマも報復侵入した。<sup>(32)</sup> ウァレンティノスがローマのペルシア攻撃に参加するよう、突厥に要請したのはこの事件であると考えられる。その後ローマとペルシアはまた講和を結ぶが、ティベリウス帝はホスロー一世に送った手紙で、ペルシアに対する年金の支払い停止を告げ、〈君の使節はトルコという異邦人に、横柄にも、ローマ人はわが奴隷で、卑しむべき奴隷として年金を支払っている〉と書いたからだ〉と述べている [John of Ephesus. VI. 12, 405 Payne-Smith, R (1860) VI. 12, 405] が、これはウァレンティノスらのもたらした情報であつたと思われる。ティベリウス帝が亡くなり、強

力で積極的なマウリキオス Maurikios が即位したのは五八二年八月であつた。

ちょうどこの頃、中国史料は珍しくササン朝ペルシアの動きを伝えている。開皇二年 (五八二) 一二月に、突厥の沙鉢略可汗 (撰図) が四〇万の軍隊で蘭州から周盤にいたり隋軍と戦つた折、出兵していた玷厥すなわち達頭が撰図に従わずに引き上げた。その時高祖が述べた言葉の中に、〈達頭前攻酒泉。其後于闐・波斯・悒怛三國一時即叛。〔隋書〕卷八四突厥伝〉とあり、于闐 (ホータン) と波斯 (ササン朝ペルシア) と悒怛 (エフタル) がともに叛乱を起こしたことがわかる。その年代は達頭可汗の酒泉攻撃の後であるから、その酒泉攻撃の年代を求めると、『周書』卷七宣帝紀の、宣政元年 (五七八) の一二月条に〈是月、突厥寇邊、圍酒泉、殺掠吏民〉、『北史』卷九九突厥伝に〈宣政元年、他鉢遂入寇幽州。…中略…是冬、他鉢復寇邊、圍酒泉、大掠去。〉と記されているから、宣政元年の冬一二月であつた。したがって、五七八年冬一二月以後、おそらく五七九年から五八二年間に、ササン朝を含む三国の叛乱が起つたことになる。

この叛乱は波斯ササン朝ペルシアだけでなく、エフタルや于闐が共同で蜂起した点が注目される。ペルシアでは、五七九年 (三月以後) にホスロー一世が亡くなり、彼とシルジブロス可汗の娘との間に生まれたホルミズド四世が即位したが、彼は対突厥、対ローマ強硬派であつた。おそらくこの叛乱はホルミズド四世の動きに連動し



たものと思われる。この叛乱の場所や詳細は分からないが、内田吟風(1975) 448は、この事件のために玷厥すなわち達頭が五八二年の出軍から〈西帰〉したとされている。いずれにせよ、ササン朝ペルシアだけではなく、悒怛エフタルや于闐ホータンが同時に行動を起こしていることから、それまで大発展を続けていた達頭の西方領域と中央アジアで、何らかの振動が始まったことが察知できる。大可汗沙鉢略と西面可汗達頭にたいして隋朝の離反策が実行されたのも五八二年で、翌五八三年には阿波可汗の達頭可汗への西走事件へと発展するが、この事件は突厥の東西分裂問題とも関係してくるので、筆を改めて論じたい。

## 結

かつて、「西突厥の西方発展と東ローマへの道」と題して小概論を書いたことがある〔内藤(1975) 148-170〕。その中で半ばは今回と同じテーマで述べており、屋の上に屋を重ねる始末となった。しかし、かつて主として依拠した中国史料やメナンドロスの『歴史』も含め、さらに多くの多角的な資料を使って考察することによって、五六八年から五八二年までの同じ事件や状況をさらに追及してみたが、慣れない図像的な資料も使用したために、苦労した。それでも自分では、少しは新しい視点や状況を見いだせたと思っている。

I. 突厥がかつてエフタルと同じ立場でソグド人との絹貿易に関わっ

突厥・ソグド人の東ローマとの交流と狼伝説

ていたことを推測し、五六八年の第一回突厥のビザンティオンへの使節派遣が、ソグド人の絹販売ルートによって行われたこと、ユスティノス帝がビザンティオンで蚕種の孵化などを見せたトルコ人はゼマルコスら突厥使節であることを指摘した。

II. 五六八年突厥と東ローマ間で締結された軍事同盟が名ばかりのものではなく、実際に相互的な義務を伴うものと意識されていたことを指摘した。軍事行動は同時ではなかったが、相手国に出軍を要請した。ササン朝ペルシアもこの状況を把握して、妨害しようとした。

III. 突厥と東ローマの同盟は五六八年から五七六年まで続き、その間に六回の使節交換が継続して行われた。相互に返礼使節を伴い、ソグド商人や他の人々が同行し、相手国に長く逗留するものもいて、相互の異なった世界や文化に触れる機会が多かったと考察した。

IV. ローマ建国伝説を表すカライ・カフカハ遺跡の牝狼と二人の子供の壁画は、突厥と東ローマの交流に伴って、ローマの始祖伝説の表現を知ったソグド人(ウストウルシヤナ人あるいはその依頼人)の表現と推察した。

V. 突厥始祖伝説を表すブグト碑頭の浮き彫りは、ローマ人の始祖伝説とその具体的な表現を知っていたソグド人が、他鉢可汗の第二の葬式に際し、その子菴羅と共同統治者撰図の、阿史那氏としての正統性を主張するために書き記したブグト碑の意に沿って彫ったと思われる。

VI. 五七六年の突厥・東ローマ同盟破棄の原因は、シルジブロスの死と対ローマ強硬派のタルドゥ達頭可汗の即位であり、ボスポロス(ケルチ)からクリミアのケルソンに進出しようとした。五七九年にはペルシアでも強硬派のホルミズド四世が登位して動き始め、五八二年には積極的なマウリキオス帝が登位し、隋朝では対突厥東西分裂策が始まって、達頭可汗は新たな動きに巻き込まれることになる。

他鉢可汗の死後、突厥で最強とされた達頭可汗の勢力は、父シルジブロスのエフタルに代わる中央アジア経営と西方東ローマとの同盟、特にソグド人を含んでの密な経済的・文化的交流の結果をうけつぎながら、同盟を破棄してさらに軍事的勢力拡大をはじめた時期のものであった。ここでは、シルジブロス時代の西方関係と特に東ローマとの文化交流が行われていた事実に関心を合わせて考察してみた。以上、大方のご批判をいただきたい。

## 註

(1) マウリキオス帝の後見によってメナンドロスが作成したが、その主なものは、コンスタンティノス七世の収集した“*Excerpta de legationibus* (使節の報告の抜粋集)” [De Boor, C. (1903) 170-221, 442-477.] と “*Excerpta de sententiis* (格言抜粋集)” に含まれている。特に前者に “*Excerpta de legationibus Romanorum ad gentes* (外国へのローマ使節の報告抜粋集)” (略称 *EL. Rom.*) と “*Excerpta de legationibus gentium ad Romanos* (ローマへの外国使節の報告抜粋集)” (略称 *EL. Gent.*) があが、Blockley, R. C. (1985) は C. de Boor

(1903) の引用していないものや、Suda 事典からの引用も行っているの<sup>1)</sup> 引用時の番号は Blockley, R. C. (1985) による。

(2) Moravcsik, G. (1958) I, 422-426. Menandros の項、および Blockley, R. C. (1985).

(3) 内藤 (1963); (1964) 47-66; (1988) 374-395 所収。これは FHG. IV. (Nachdruck (1975) Frankfurt/Main) からの訳である。文中で引用する頁は内藤 (1988) による。

(4) Moravcsik, G. (1958) II, 118 の *Διζήτοντες*; *Διζήτοντες*; 275 の *Σιζήτοντες*; *Σιζήτοντες* 及び *Σιζήτοντες* の項を参照された。

(5) プロコピウス Procopius [Historia Arcana XXV: Dewing, H. B. (1960) 296-301]; Bury, J. B., (1923), 330-333.

(6) Yule, H., Cordier, H. (1915), (1942・1966), Vol. I, 204, I. 43 に、原文 *Ἰουστινός Justin* が、Justinian と訳されているので注意が必要。スキタイ語は古代トルコ語に間違いないが、それが何文字で書かれていたのかは不明である。古来、突厥文字とする説もある。Cahun, E. (1896) 112. しかし、後述する五八一年建立のブゲト碑文や、五九九年頃建立とされる中国新疆省昭蘇県の小洪(那)海 Mongolkule 碑文がソグド語ソグド文字碑文であることは不整合である。

(8) 内藤 (1963) 6-7 注 (5) ・ (6) (1964) 46-47 注 (5) ・ (6) (1988) 386-387 注 (5) ・ (6) を参照。

(9) ゼマルロス使節の突厥行使についての言及は John of Epiphania, [FHG. IV. 274], Theophanes Byzantinos, [FHG. IV. 270] にあたる。John of Ephesus [Payne-Smith, R. (1860)] Part 3, VI. 12 に『教会史』で、東ローマ・ペルシア・突厥に関する相当詳しい記述をもっているが、説話的要素が多いので注意が必要である。

(10) 尚樹啓太郎 (1999) 228-229 は「当時のユスティヌス二世はランゴバルト族のイタリア侵入に関心が向いていて同盟は成立しなかった。これがビザンツ史上にトルコ人が現れた最初である。」と述べられている。

(11) John of Ephesus, Payne-Smith, R. (1860) Part 3, VI. 23, 425-27 は、ローマ使節とペルシア使節の可汗庭での対決と、可汗はローマ

がペルシアに貢納していることを聞いてゼマルコスを責め、彼は言い訳している。

- (12) Turtledove, H. (1983) 292-301, Whitby, M. (1988) 218などを参照せよ。
- (13) Caetani, L. (1909) 記載の原文は、*Āyā Sūfiya Library* 所蔵 MS [GMS o.s.VII,1]G Facsimile による。
- (14) Miller, D.A./Rochester, N.Y. (1971) 56-76. によれば、ローマの締結した条約の記述には三種類あり、突厥の場合は、共通の敵に対しては同時に動くことを要請し、互いの支配圏を侵さないよう、同盟軍が独自の判断で動くという、最も単純な攻守同盟であった。
- (15) アナンカステスは、記述の順序に従えば、多分第三回目の突厥使節で、タグマ・タルカンとともに突厥に來た名称不明のローマ使節の帰国に同行したと考えられる。もし記述が順不同であれば、使節交換の回数全部で六回となる。
- (16) 注(9)を参照せよ。最詳で最も整合的であるのがメナンドロスの記述である。John of Ephesus, Part 3, VI 23は、ゼマルコスらの派遣を「ユスティノス帝の治世第六年」とし、彼らは「一年の旅行後」到着し、「二年後」帰国したとする。すべて John of Ephesus によれば、彼らの帰着は五七五年になるから、これはあり得ない。Blockley (1985) 267, n.150は、ゼマルコスは五七一年遅く帰着したとする。
- (17) 発表された貨幣の表には、連珠紋に囲まれて王冠をつけた王像が、裏面には連珠紋の中にタムガとソグド文字で称号と王名が見える。Смирнова, О. И. (1981) 31-35, 324-335, No.1419-1431, Таб. XLIX-L. も参照せよ。
- (18) Pugachenkova, G., Khakimov, A. (1988) 78. *The Capitoline She-wolf, 7th-8th century / Fragment of painting from Kalai-Kakhakaha / The Hermitage, Leningrad.* として、牝狼の部分の原画カラー写真を掲載している。本論文で掲載した壁画の描きおこし図 A は、Herzegov, H. H. (1973a) 57 のもので、パネルの番号もこれによる。
- (19) Herzegov, H. H. (1968) Рис. 1. は、牝狼と二人の幼児の壁画を精写  
突厥・ソグド人の東ローマとの交流と狼伝説

した手描きの絵。

- (20) Azarpay, G. (1981) 142. Figure 59. 141-2, n.66 も参照せよ。
- (21) Pugachenkova, G., Khakimov, A. (1988) 78. 同地出土の原壁画写真 *76 Four-armed Goddess Mounted on a Lion.* Grenet, F., Zhang Guangda, (1996) 179-180, Fig.4. 同185, n.23 によれば、Durga 像の影響を受ける四臂のナナ像の初期のものとして、六世紀にかけられている。
- (22) Grenet, F. (1986) Fig.39. 特2 Fig.41-Is-2 に見える。
- (23) Rune Martin 監修 (1992) 217 に「牝狼の乳を飲むロムルスとレムス、ローマの墓、シヨプロン、ハンガリー」として写真が掲載されている。同書の松村一夫訳 (1997) 248 に「同じ写真が同じ説明を付されている。シヨプロン Sopron はハンガリーの西北端の国境近くで、ウイーンの南南東約六〇キロにある。これは同伝説の造形例中のほんの一例であると思われる。」
- (24) ペンジケント出土の貨幣の一つに、狼伝説を打ち出した径約二・三センチの金の硬貨がある。それは一九四八年、ペンジケントの第二神殿北の垣の奥で発見された。円形の孤を切るように引かれた一本の線の上に、左向きに立つ狼が後をふりかえり、二人の子供が狼の乳を吸っており、明らかにロムルス・レムス伝説を表しているが、その周囲に書かれた銘はつづれていて読みとれない。Belenicki, A. M. (1958) 135, Pic. 33.3. ロムルス・レムス伝説を表した貨幣は、ローマ時代の各地で作られている。
- (25) Powers, D. S. (1985) 173; Grenet, F., De la Vaisière, E. (2002) 167-172.
- (26) メナンドロスは、五六八年ゼマルコス使節が長期旅行の後、まず「ソグディアナに至った」[EL.Rom.8: Blockley 10.3: FHG.IV.20.227: 内藤379]と述べているが、これはシルジブロスの牙庭に向かう途中、天山北路に並ぶソグド人植民都市「率利」(『大唐西域記』卷一、本文一二頁参照)に至ったことをさす。後にソグド本土を訪れたとしても、まずは突厥牙庭を目指したはずであるからである。
- (27) 「ムグ山文書A9」は、アラブ人によるホージェンドの陥落を述べ、町を引き渡したウストゥルシャナの一部の人々が(ムグ山へ)来るだ

らうと述べている。

- (28) これは一九六九、七〇年に行われたソヴェエト・モンゴリア考古学的発掘の際に発見されたという二つの小さな断片ではないかと思われる。<sup>90</sup> Klyuštornyi, S. G. and Livšic, V. A. (1972) 69.

- (29) 『隋書』禮儀志に〈三品已上立碑、鶴首龜趺、趺上高不得過九尺〉とあり、他録可汗が範を求めていた北齊の葬送令は不明であるが、多分同様と思われる。フグト碑は〈龜趺を除く碑石は高さ一九七センチ〉〔森安・オチル (1999) 122〕で、九尺は越えておらず、〈狼首〉だけが異なっている。この遺跡に中国式廟が建てていたことは、四角い基壇の跡、柱や柱の跡、瓦や鳳凰の絵が彫られた石砌断片が残っていたことから明らかである。<sup>91</sup> Klyuštornyi, S. G. and Livšic, V. A. (1972) 76; Войтов, B. E. (1996) 21-22, 27-30, 104-105, и пр. Рис. 7, 48-3, 49, 64.
- (30) Книготорный, С. Г. и Лившиц, В. А. (1971) 129-130, No 14. Klyuštornyi, S. G. and Livšic, V. A. (1972) 76.

- (31) 吉田豊 (1999) 122-24。内陸マシマ史学会二〇〇三年度公開講演会田豊氏「モンゴル高原のシグド語碑文について」で、フグト碑は阿史那の血統の正当性を主張していると考えられた。蕃羅は少なくとも父の第二の葬式を行うまでの約半年間、可汗として在位していたことがわかる。<sup>92</sup>

- (32) この東ローマとササン朝の関係については、Turtledove, H. (1983) 277-99; Whitby, M. (1988) 62-268, などを見参照しよう。

末節ながら、多くの御教示をいただいた熊本裕・森安孝夫・片山章雄・石見清裕・田邊美江氏、その他の方々にお礼を申し上げます。

#### 史料と略称

*Excerpta de legationibus*, edited by De Boor, C. (1909) Berlini.

*Excerpta de legationibus Romanorum ad gentes* = EL. Rom. (略称)  
*Excerpta de legationibus gentium ad Romanos* = EL. Gent. (略称)

*Excerpta de sententiis*, edited by Boissevain, U. Ph. (1906) Berlini.

John of Ephraïma [Joannis Ephraïmensis], *Fragments Historiarum*

*Græcorum*, Band IV, edited by Müller, C. (1851) Paris  
 = FHG. IV. (略称) 272-276.

John of Ephesus [Iohannis Ephesini], *The Third Part of Ecclesiastical History*, translated by Payne-Smith, R. (1860) Oxford.

Menandros [Menandros Protector], *Historia*.

*Menandri Protectoris Fragmenta*, FHG. IV. 200-65.

*Menander, the Guardsman. Introductory Essay, Text, Translation, and Historical Notes*, by Blockley, R. C. (1985) Liverpool.

= Blockley (略称)

Miskawayh [Abū Alī Ahmad b. Muḥammad b. Miskawayh], *Tajārib Al-Umam. The Tajārib Al-Umam or History of Ibn Miskawayh, with a Preface and Summary*, Vol. 1, by Caetani, L., Lyden, London (1909); *Œuvres Spécimens de la Littérature Sassanide Conservés dans les Bibliothèques d'Istanbul, Introduction et Traduction des Extraits du Kārnamāğ d'Anūšīrwān, Journal Asiatique, Année 1966*, 1-45, par Grignaschi, M., (1966); *Miskawayh, Tajārib Al-Umam, edited, annotated & introduced*, by Emāmi, A. (2001) Tehran.

Procopius [Procopius Caesarea]  
*Historia Arcana. The Anecdota or Secret History*, text and translated by Dewing, H. B. (1935-1954-1960) London.  
*Upper ton Polen Logos Protos. The History of Wars*, Book VIII, text and translated by Dewing, H. B. (1928-1954) London.

Tabarī [Abū ja'far Muḥammad b. Jarīr al-Tabarī], *Tārīkh al-rusul wal mulūk. The History of al-Tabarī*, Vol. XXIV, translated by Powers, D. S. (1985) New York.

Theophanes Byzantinos: (Theophanis Byzantii Fragmenta), FHG. IV. 270-71.

『周書』卷七宣帝紀 (正史中華書局本)

『隋書』卷八禮儀志三：卷五一長孫晟傳：卷八三西域傳：卷八四突厥傳

『北史』卷九突厥傳

『舊唐書』卷一九八西戎傳

『新唐書』卷二一五下突厥傳下：卷二二一西域傳  
『大唐西域記』卷一（京大本附考異索引）  
『宋本冊府元龜』卷九七〇

#### 参考文献

- Azarpay, G. (1981) *Sogdian Painting, The Pictorial Epic in Oriental Art*, London.
- Blockley, R. C. (1985) *The History of Menander the Guardsman, Introductory Essay, Text, Translation, and Historiographical Notes*, Liverpool.
- Bury, J.B. (1923) *History of the Later Roman Empire*, London.
- Cahon, E. (1896) *Introduction à l'histoire de l'Asie*, Paris.
- Dölger, F. (1949) *Das Kaiserjahr der Byzantiner*, München.
- Grenet F. (1986) *L'Art zoroastrien en Sogdiane, Mesopotamia XXI*, 97-131.
- Grenet, F., Vaissière, E. du la ((2002)) *The last days of Panjikent, Silk Road Art and Archaeology*, VIII. Камакура, 155-196.
- Grenet, F., Zuang Guangda (1996) *The Last Refuge of the Sogdian Religion: Dunhuang in the Ninth and Tenth Centuries, Bulletin of the Asia Institute, New Series/Vol.10*, Michigan, 175-185.
- Hannestad, K. (1955-57) *Les relations de Byzance avec la Transcaucasie et l'Asie Centrale aux 5<sup>e</sup> et 6<sup>e</sup> siècles, Byzantion 25-27*, 421-489.
- Klyashtornyi, S.G. and Livšic, V.A. (1972) *The Sogdian Inscription of Bugut Revised, Acta Orientalia Hungarica XXVI-1*, 79-102.
- Marshall, B. with an Appendix by Livshits, V.A. (2002) *Legends, Tales, and Fables in the Art of Sogdiana*, New York.
- Martin, R. ed. (1992) *Dictionnaire culturel de mythologie Gréco-Romaine*, Paris.
- Miller, D.A./ Rochester, N.Y. (1971) *Byzantine Treaties and Treaty-Making: 500-1025A.D., Byzantinoslavica 32-1*, 56-76.
- Moravcsik, G. (1958) *Byzantinoturcica I II*, Berlin.

突厥・ソグド人の東ローマとの交流と狼伝説

- Museum Rietberg Zürich (1989) *Oxus, Neue Funde aus der Sowjetrepublik Tadschikistan.*
- Powers, D. S. tr. (1985) *The History of al-Tabari*, Vol. XXIV, New York.
- Pugachenkova, G., Khakimov, A. tr. by Gitman, S. (1988) *The Art of the Central Asia*, Leningrad.
- Russu, I. I. (1970) Zemarchos, *Dacia Tome XIV*, 411-418.
- TIKA=Түрк Ыбырлиги ве Калкима Idaresi Вақаллғи [TIKA] (2001) *Mogolısandakı Türk Anıtları Projesi Albümü (Album for the Project on Turkish Monuments Mongolia)*, Ankara.
- Turtledove, H. (1983) *Justin II's Observance of Justinian's Persian Treaty of 562, Byzantinische Zeitschrift 76*, 292-301.
- De la Vaissière, E. (2002) *Histoire des marchands Sogdiens*, Paris.
- Whitby, M. (1988) *The Emperor Maurice and his Historian Oxford.*
- Yule, H., (New Edition) by Sordier, H. (1915), (Republished in Tajreid) (1942 • 1966) *Sabah and the Way Thither*, London.
- Бенишкн, А. М. (1958) *Общие результаты раскопок городища древнего Пенджикента, Материалы и исследования по археологии СССР 66*, Москва, Ленинград.
- Войтов, В. Е. (1996) *Древнетюркский пантеон и мифология*, Москва.
- Кляшторный, С. Г. и Лившиц, В. А. (1971) *Согдийская надпись из Бугута, Страны и народы Востока 10*, Москва, 121-145.
- Лившиц, В. А. (1962) *Согдийские документы с монетами из горы Муг. 2*, Москва.
- Нематов, Н. Н. (1968) *Емблема Рима в живописи Уструшаны, Известия Академии наук Таджикской ССР. No.2 (52)*, 21-32, Рис.1.
- Нематов, Н. Н. (1973а) *О живописи дворца афшинов Уструшаны, Советская Археология*, 183-202.
- Нематов, Н. Н. (1973б) *Емблема Рима в живописи Уструшаны и древневосточная мифологическая традиция, Известия Академии наук Таджикской ССР. No.1 (71)* 3-10.

- Смирнова, О.И. (1971) Первые монеты из Уршпаны, Эпиграфика Востока XX, 59-64
- Смирнова, О.И. (1981) Сводный каталог Согдийских монет, Москва.
- 内田吟風 (1975) 「突厥初世史の研究」『北アジア史研究 鮮卑柔然突厥篇』同朋舎 429-493.
- 香山陽坪 (1976) 「シャフリスタン (タジク共和国) 発見の壁画」『江上波夫教授古希記念論集 考古・美術編』山川出版社 253-263.
- 内藤みどり (1962) 「西突厥の一君主 Tourxanthos について」『東方学』24, 30-40.
- 内藤みどり (1963) 「東ローマと突厥との交渉に関する史料—Menandri Protectoris Fragmenta 訳注—」『遊牧社会史研究』第二二冊
- 内藤みどり (1964) 「東ローマと突厥との交渉に関する史料—Menandri Protectoris Fragmenta 訳注—」『内陸アジア史論叢』内陸アジア史学会所収, 41-66.
- 内藤みどり (1975) 「西突厥の西方発展と東ローマへの道」『東西文化交流史』雄山閣 148-170.
- 内藤みどり (1988) 「東ローマと突厥との交渉に関する史料—Menandri Protectoris Fragmenta 訳注—」『西突厥史の研究』早稲田大学出版部所収, 374-395.
- 尚樹啓太郎 (1999) 『ビザンツ帝国史』東海大学出版部
- 松田壽男 (1929) 「西突厥王庭考」(一)―(四)、『史学雑誌』第四十編—四號 (1956, 増補版1970) 『古代天山の地理歴史學的研究』早稲田大学出版部
- 森安孝夫・オチル責任編集 (1999) 『モンゴル国現存遺跡・碑文調査研究報告』中央ユーラシア学研究会
- 吉田豊 (1999) 「フグト碑文ソグド面テキスト・翻訳」森安・オチル (1999) 所収, 122-124.
- ルネ・マルタン監修・松村一夫訳 (1997) 『ギリシア・ローマ神話文化事典』原書房